

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：32679

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580029

研究課題名(和文) 勅使河原宏映画関連資料による「モンタージュとしてのアーカイブ」研究

研究課題名(英文) Researching the concept of "archive as montage" using Hiroshi Teshigahara's filmic materials

研究代表者

久保 仁志 (Kubo, Hitoshi)

武蔵野音楽大学・音楽学部・講師

研究者番号：00626765

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的はデジタル・データベースを主眼に据えたアーカイブ構築が主流とされる現在において、改めて資料体をアーカイブ化するプロセス(設計・構築・公開)とそのインターフェース(資料体とその利用者の界面)の不可分性に着目し、映画のモンタージュの原理を取り入れ、アーカイブの新たなインターフェースの可能性とその方法論を探求し展開することにある。

その端緒として、勅使河原宏(1927-2001)映画関連資料の分類・調査を行うとともに、ロケ地も重要な資料であると考え、《おとし穴》をサンプルとし、北九州筑豊一帯の調査を行った。その過程で《おとし穴》自体が重要なアーカイブ・モデルであることを見出した。

研究成果の概要(英文)：While the current emphasis in archive construction is on digital databases, the purpose of this research is to draw renewed attention to the indivisibility of the processes for archiving materials (design, construction, publishing) and their interfaces (the interfaces between bodies of data and their users), drawing on the cinematic principle of montage in order to investigate the possibility and methodology of new archive interfaces. As a starting point, in addition to conducting analysis and research into materials relating to the films of Hiroshi Teshigahara (1927-2001), film locations were also considered to be important materials, and taking the film Pitfall as a sample, research was conducted in the Kitakyushu and Chikuho regions. Through this process it was found that Pitfall itself could be seen as an important archive model.

研究分野：アーカイブ

 キーワード：アーカイブ理論 モンタージュ理論 映画理論 芸術理論 日本映画 インターフェース開発 美術  
映画史

## 1. 研究開始当初の背景

### ①-1 アーカイヴとインターフェース

研究代表者は〈草月アートセンター（以下、〈SAC〉）〉 関連資料のアーカイヴ化（2004-2011）を推進してきた際、アーカイヴは身体としての資料体と、その顔としてのインターフェースで構成され、それらは不可分だという問題を培った。作業プロセスの中でそのインターフェースは常に可変的でなければならず、膨大な資料体を地図のように縮約し表現していなければならない。そのため、随時変更可能なWEBサイトを構築した。しかし、プロセスの進展をより十全に反映させ、資料体が有する時空間を表現するための動的な方法を求めて映画をインターフェースとして用いるという着想へと至った。

また、具体的な資料を編成しアーカイヴを構築していくプロセスそれ自体が映画のモンタージュと類似しており、モンタージュ理論を応用するとともに、アーカイヴの視点からモンタージュ理論に新たな光を投げかけられるのではないかと考えた。

### ①-2 勅使河原宏のモンタージュ

勅使河原宏の初監督作品『北斎』（1953）は、ほぼ全て静止画で構成されている映画であるにもかかわらず、北斎の生と画業、その時代や町人らの生活・思考までも縮約して表現している力動的な作品となっている。それは映画の原理的力動性によるだけでなく、対象を縮約する様々なロジックの力動性によるものである。特に『北斎漫画』の様々な身振りをする人物群の連続ショットによりダンスのような出来事を生み出すシーンなど、北斎の実践と映画の仕組みを数分に縮約し、表現している。本研究は、このように出来事を縮約する方法に長けた勅使河原宏のモンタージュ原理を明らかにし、それらをアーカイヴ化の作業プロセスへと接続することを目論む。プロセスをモンタージュとして実践するこの方法論を「モンタージュとしてのアーカイヴ」研究と呼ぶことにした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、デジタル・データベースを主眼に据えたアーカイヴ構築が主流とされる現在において、改めて資料体をアーカイヴ化するプロセス（設計・構築・公開）とそのインターフェース（資料体とその利用者の界面）の不可分性に着目し、草月会館（赤坂）に未整理の状態に残された勅使河原宏（1927-2001）映画関連資料のアーカイヴ構築を通し、アーカイヴの新たなインターフェースの可能性とその方法論を探求し展開することにある。新メディアによって、出来

事を記録・伝達・受容する手段が多様化する一方で、旧メディアは相対的堅牢性その他によってまだ有効性を保持している。現在はそれらが共存している移行期であり、それらを同時に記録・保存・伝達・包含するための方法論の構築が必要である。本研究は、「モンタージュとしてのアーカイヴ」という方法論を探求することで、それに答えるものである。

## 3. 研究の方法

（1）一般財団法人草月会所蔵の勅使河原宏映画関連資料（映画台本、カット表、予算表、セット図面、ロケハン写真、リーフレット、パンフレット、映画評その他）の調査・整理・撮影・リストの作成を行い、映画関連資料のフレームおよび、アーカイヴ構築の方法を実践から立ち上げていく。

（2）映画のロケ地も一つの資料体として扱い調査・撮影を行う。

（3）勅使河原宏映画のモンタージュの方法を分析する。（本研究においては《おとし穴》をモデルとした。）

（4）上記三つの方法を通して、モンタージュとアーカイヴについて分析する。

## 4. 研究成果

（1）一般財団法人草月会所蔵の勅使河原宏映画関連資料の調査・整理・撮影・リストの作成を行った。現在、同会資料室において映画関連資料は閲覧可能な状態になった。

この作業を通じて以下のようなことが明らかになった。映画はとりもなおさず複数の人間の並行的な作業によって織りなされる一つの出来事であるということ。例えば、同じ台本だったとしても所有者（監督とスクリプター）によって書き込みの差異が著しく現れる。監督は構想や修正点を書き込み、別のフォーメーションを模索し続けているが、スクリプターは撮影現場で起こっている出来事を詳細に記録し続けている。もう一つは、別の作品とでも呼ぶことができるような台本にのみ書き込まれている実現されなかった構想群および採用されなかったカットの束の存在である。実現されていく各プロセスにおいて見られていた潜在的な映画群は資料からのみ照らし出される別の映画である。

（2）一般的には映画関連資料の中に、ロケハン時の写真は入れられるだろうが、ロケ地そのものが資料とされることは少ないだろう。本研究においては、映画関連資料のフレームの設定をいかにすべきなのかを探求するための枠組みとしてロケ地も資料の一つ





出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

● 展示企画

渡部葉子・久保仁志・堀口麗「アート・アーカイヴ資料展 XV：なだれうつ！アヴァランチ」、2017年1月11日ー3月17日（11:00-18:00） | 慶應義塾大学アート・スペース

● 展示企画関連シンポジウム

久保仁志・土屋誠一・森大志郎「アート・アーカイヴ資料展 XV：なだれうつ！アヴァランチ」関連催事「誌面に包囲されること」、2017年3月10日 17:00-18:30 | 慶應義塾大学アート・スペース

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保仁志 (Kubo, Hitoshi)  
武蔵野音楽大学音楽学部講師  
研究者番号：00626765